

平成 30 年 12 月 14 日

平成 30 年度 第 1 回教育課程編成委員会 報告書

日時：平成 30 年 11 月 30 日（金）16：00～17：00

場所：日本福祉教育専門学校 高田校舎

出席者：委員	松山 慎司（社会福祉法人西東京市社会福祉協議会 専門員）
委員	金川 正宗（社会福祉法人敬心福社会池袋敬心苑 施設長）
委員	肥後 義道（立川市社会福祉協議会）
教員	陶山 哲夫（学校長）
教員	白川 耕一（教務部長、社会福祉士養成科教員）
教員	中島 たまみ（ソーシャル・ケア学科）
教員	細野 真代（介護福祉学科 副学科長）
教員	有菌 暢子（社会福祉学科 学科長）
教員	中山 剛志（言語聴覚療法学科 学科長）
事務局	中嶋 裕之（事務次長）
事務局	浅見 豪（教務課課長代理）
事務局	鈴木 達也（学務課）

議題

1、学校長挨拶

冒頭に陶山より挨拶があった。

2、企業等と連携した取り組みの説明

各学科より、企業と連携した教育の実施レポートについて報告があった。

ソーシャル・ケア学科（中島）

①企業と連携した教育

「カイゴのミライ」

②実施目的

将来の日本社会で活躍できる介護福祉士になるための知識と技術を、各分野の第一線で活躍する企業から学ぶ。

③内容

・トラベルヘルパー、コーディネーション運動、IT、ハンドケア、ロボケアの5つ企業によるオムニバス形式の授業を行う。授業ではグループワークや座学、実技などを行う。

④成果

- ・トラベルヘルパー養成講座では、高齢や健康不安などを抱える方の旅行や外出の希望を実現するために必要な基礎知識を理解することが出来ている。
- ・コーディネーション運動を通し、介護予防における必要性を学ぶとともに「自ら行動する」「やる気の引き出し」などのコーチングの基本も学ぶことが出来ている。(普及コーチの知識を習得する)
- ・ITでは、現状をとらえ、今後、介護現場で活用するための基礎的な考え方について学び、理解を深めることが出来ている。
- ・ハンドケアでは基礎を座学と体験を通し学び、介護現場での必要性や有用性を理解することが出来ている。
- ・ロボケアでは、「ロボケアとは何か」を知り、「これからのテクノロジーの可能性」などの基礎を学ぶ。国策を理解しながら、「テクノロジスト」としての介護職像について学ぶことが出来ている。

⑤意見交換を踏まえた今後の活用について

- ・1年次での学びでは、知識や技術を含め有用な学習内容であったとの評価が多かった様子である。しかし、2年次になり、選択科目として継続学習（企業ごとに選択する）を希望する学生が少ない。特に高校新卒の学生は顕著である。学生の声などから「将来、どのように活用していくか。どのように役立つのか」などイメージできにくいようである。それらに答える内容も検討していく必要がある。
- ・介護職が活躍する現場は多方面に渡っている。さらに学生が興味・関心を持ち、積極的に学習に取り組む為にも、講座内容など学生からの意見を交え、検討していくことも必要である。

介護福祉学科（細野）

①企業と連携した教育

「介護のミライ」

②実施目的

10年後、20年後も活躍できる人材を目指して、これからの介護に求められる専門職となるための知識と技術を、各分野の第一線で活躍する企業から学ぶ。

③内容

ミライの福祉を先取りし先進的な介護サービスを実施している企業や団体と連携して行う。

5つの企業（トラベルヘルパー、コーディネーション運動、IT、ハンドケア、ロボケア）によるオムニバス形式（1企業3コマ）の授業にて、グループワークや座学、実技等を行う。

2年次に資格取得等に向けて1つの企業を選択しより理解を深めていく。

④成果

- 1、トラベルヘルパー養成校座3級の学びを通してその理解を深めることが出来ている。
- 2、コーディネーション運動の必要性と知識を習得することが出来ている。
- 3、IT, ICT, IOTについてふれながら基礎的考え方を学び理解を深めることが出来ている。
- 4、ハンドケアの基礎と座学と体験を通して学び必要性や有用性を理解することが出来ている。
- 5、ロボケアとは何かを知り、これからのテクノロジーの可能性などの基礎を学び将来像としての介護職像について学ぶことが出来ている。

⑤意見交換を踏まえた今後の活用について

1年次は知識や視野が広がったという意見も多く学生から好評であった。しかし、2年次に実際に科目を選択する学生が少ないという結果となった。

社会人を経験した学生は、2年次に選択する人が多かったが、高校新卒者は少数となった。介護のミライの学びが、社会人を経験していない学生には、どのように活かすことができるのかという将来像と結び付けられなかったのではないかと考えられる。

①学生のニーズとマッチしている学びなのか

②将来どのように知識や技術を活かすことができるか、現実性のあるものとして伝えていく工夫。

これら2つのことを再検討していく必要があると考えられる。

社会福祉学科（音楽療法コース）（有菌）

①企業と連携した教育

- 1) 音楽療法実習（一部）
- 2) 出張コンサート

②実施目的

現場のニーズを肌で感じながら、対象者の役に立ち、喜ばれる音楽活動を実施できるようになる。

③成果

- ・在学中よりプロフェッショナルとしての責任と自覚を持って実践に臨む姿勢を身につけることが出来ている。（学生によって実力の差はあるものの、どの学生も極めて主体的に実践に臨んでおり、休み時間や放課後に熱心に準備する姿が見られている。）
- ・多くの学生が、卒業後に現場で即実践できる力を身につけることが出来ている。
- ・提携先施設に就職し実践を続ける学生も居り、音楽療法を実施する現場を増やすことにも繋がっている。

④議題

施設の利用者にとっては、施設の他の業務と同じ水準を期待することとなる為、活動の質を担保する必要がある。このことが、メンタル面での不調や、発達障害などを持つ学生の場合に、過度なプレッシャーとなる場合がある。教員はこれに配慮しサポートを行うが、特にここ数年は、難しさを感じる（学生の）ケースが増えている。

言語聴覚療法学科（中山）

①企業と連携した教育

「臨床実習」

②実施目的

言語聴覚士養成校指定規則により、外部の医療機関での 480 時間以上の臨床実習をすることによって、臨床実習の単位を取得することができる。

本質的には、臨床実習は、学校での学習で得た知識の活用と実践を試みることにより、言語聴覚士に必要な知識、技能、心構え、その他の臨床的能力を習得することを目標としている。学生には、臨床場面において個々の知識を統合し、言語聴覚士としての視点をもって対象者と柔軟に関わっていく基礎的能力を養う努力をするよう指導している。臨床の場で評価方法・治療方法等について、指導者の臨床を見学し、また、実際に選択し実施することを通して、対象者に応じた柔軟な対応を可能にする臨床的問題解決能力を体得することが第一の目的である。同時に、対象者にかかわるスタッフの一員としての立場を自覚し、チームアプローチの実際を知り、言語聴覚士の役割や行動を具体的に認識することによって、研鑽を怠らない、人間性豊かな言語聴覚士となることを目指す。受けた教育を自らのうちに統合して、言語聴覚士としての一步を踏み出す準備をする機会であると考えている。

③内容

1.患者（対象者）への対応の仕方を体得する。

- 1)患者の人格を尊重し、誇りを傷つけぬよう配慮する。
- 2)患者ならびに患者家族との良好なコミュニケーションを心掛ける。
- 3)担当症例に対する適切な説明や、臨床場面におけるリスク管理に十分配慮する。
- 4)担当症例との関係をいかに形成していくかを考え、自らの役割を自覚するとともに、専門職としての資質や人間性を高めていくよう努力する。

2.評価技術を症例に適用し、その障害像を把握し、言語聴覚障害学的診断を行う。

- 1)予め情報収集の方法、各種検査法などに習熟しておく。
- 2)必要な情報を的確に収集する。
- 3)症例に即した評価方法を選択・実施し、問題点を抽出し、症例の障害像とニーズを的確に把握する。
- 4)適切な評価に基づいて仮説を立てて検討し、言語聴覚障害学的診断を行う。

3.適切な評価・言語聴覚障害学的診断に基づいて治療計画を立案し、治療を実施する。

- 1)担当症例に必要とされる言語聴覚障害学的リハビリテーションに関して、治療計画を具

体的に立案する。

2)立案した治療計画に基づいて、担当症例に対し実際に治療・訓練・指導・助言を行う。その臨床経過について検討を加える。必要に応じて、治療計画の合目的な修正・変更を適切且つ柔軟に行う。

3)症例の状態に合わせて臨床を行うためには、言語聴覚士としての臨床的判断力、意思決定能力、問題解決能力が重要であることを自覚する。

4.専門職として必要な事項を記録し、報告する能力を習得する。

1)臨床経過について毎回正確に記録するとともに、実習指導者および他部門のスタッフに対して、適切な時期に十分な情報量を含む報告をする。

2)報告書の作成技術を身につける。

5.チームアプローチの方法を体得し、専門職の一人としての協調性と独立性を培う。

1)チームアプローチに不可欠な他部門のスタッフとの相互理解と協調性について、具体的に認識し、行動する。

2)他部門の専門性を尊重すると同時に、言語聴覚士としての専門性・独立性を認識し、症例の福祉に貢献することを理解する。

④成果

上記の目標・内容を踏まえた臨床実習を行うことによって、卒業後の即戦力としての臨床活動が可能となる言語聴覚士になることが出来る。

⑤意見交換を踏まえた今後の活用について

発達障害や精神疾患を抱えた学生の増加といわゆる合理的配慮の考え方の中で、上記のような目標・内容を踏まえた臨床実習ができなくなっている現実についてどのように解決すべきということは、多くの養成校現場での共通した悩みである。

3、おわりに

今年度第2回の委員会は3月の開催を予定している。